

派遣者番号	30J03	氏名	田中 周作
研究主題 —副主題—	生徒の output を促す指導と教師の介入 —内省と改善を繰り返した授業研究—		
派遣先	東京学芸大学 大学院	担当教官	高山 芳樹
所属	都立武蔵高等学校	所属長	高橋 豊

キーワード：インタラクション アクションリサーチ スピーキング

## 1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

本研究は実践研究であり、また当事者研究でもある。私は教師として教壇に立ち続けながら、この研究を行っている。そのため、あるアクティビティや指導が有効であったかどうかという仮説検証的な研究よりも、実践研究の方が現職教師向きの研究であると考えた。どこかでうまくいった指導が、他でうまくいくとは限らない。これは教師が、どのような生徒にどのように語りかけたか、またそのときの教室の雰囲気、生徒同士の関係性などといった要因が、指導や活動に大きく影響を与えるからである。アクション・リサーチでは教師と生徒の変化を細かく追うため、教師と生徒双方の成長の助けとなる。教師は内省的実践者として常に振り返り、改善し、行動していかなければならない。その様子を記録していくのが、アクション・リサーチである。研究の中で、自分の失敗や改善すべき点に目を向けていくことは苦しいことも多いかもしれないが、それが自己の成長への近道であると考えた。

単純な仮説検証型の研究からは分からない要因が実際の授業や活動の中には数多く含まれている。私は現場の教師である以上、そういった点も細かく記録を取りながら研究を続けたいと考えた。以上のような理由から、本研究ではアクション・リサーチの形式をとり、英語的側面やそれ以外の点にも注目しながら授業研究をし、内省する中で出てきた自分自身の改善点に着目していくことにする。内省を繰り返し、生徒の反応や声に基づく授業改善を行いながら、日々生徒と関わる teacher researcher としての研究を行う。

## 2 研究の内容・研究の方法

本研究では自身の英語での teacher talk、生徒との英語での interaction、教師と生徒双方の変化を追っていくことにする。

これまでの教師生活を振り返ると、常に何らかの課題からスタートし、働き続ける中で一つずつ改善し、ゆっくりではあるが教師として成長してきているように感じている。質的研究で論文を書くことにより、課題・改善のサイクルの中で自分自身の指導を改善していきたいと考えている。

また、生徒の speaking 分析に関しては、即興的なやりとりを目的とした活動に至るまでに、大きく分けて三段階あり、それぞれ以下のようにまとめて分析していくことにした。

- ① 導入段階 introductory phase
- ② 活発なやりとりの段階 active interaction phase
- ③ 総合的なやりとりの段階 comprehensive interaction phase

三段階の特徴を簡潔にまとめると、次のようになる。

- ① 導入段階 やりとりを経験する段階
- ② 活発なやりとりの段階 pair でQ&Aを継続させ、ある一定時間英語を話し続ける段階
- ③ 総合的なやりとりの段階 様々な会話技術を取り入れながら、一つの話題から話を広げ、会話を継続していく段階

各段階において、即興的なやりとりにつなげるためにどのような speaking 活動を行ってきたか、また、各時期に speaking 活動以外にどのような取組をしてきたか、そしてそれらの取組がどのように生徒の speaking 力の伸長に貢献してきたかをまとめていく。

### 3 研究の結果

5月、6月、10月と3回にわたり授業を録画した。5月の時点では生徒の声がまだ小さかった。これは、まだ生徒自身が授業で英語を発すること自体に慣れていない、戸惑いがある、周りのクラスメイトとの仲も深まっておらず互いに照れがあることなどが原因として考えられる。5月、6月の時点では、教師の英語は指示英語がほとんどで、生徒との interaction や生徒に発話を促すことが少なかった。基本的には、指示を出す、教師の後に繰り返し発音させる、英語で歌わせる、教科書や絵本の読み聞かせを黙って聞かせるというような、生徒への input の量に対し、生徒による output の量が圧倒的に少ないということが分かった。学習の初期段階では、生徒の使用可能語彙は限られており、input に重きを置いた授業構成になっていたと考えられる。数少ない教師と生徒の interaction の場面でも、生徒は日本語で応じることが多かった。

10月の記録を見ると5月、6月よりも多くの変化があった。生徒の声は明らかに以前より大きく出るようになっていた。反応スピードも速くなり、教師による質問の後の静寂は、ほぼなくなった。たとえ理解不十分だとしても、何らかの反応を見せるようになった。Q&A (interaction) も1ターンで終わるのではなく、数ターン続くように少しずつなった。3～4か月の間に生徒は多くの語彙・表現を学習してきた。speaking 活動にも慣れてきた影響もあるが、良い雰囲気での学習できるようになったことが記録から確かめられた。

### 4 研究の考察

#### (1) 教師の介入に関して

教師の発話分析の結果、教師の介入には役割が次の五点あることが分かった。

- ① 生徒の発言を正しく言い直す error correction
- ② クラス全体に質問に答えるように働きかける question asking and encouraging
- ③ 生徒の会話を継続させるようにサポートする support
- ④ 生徒の発言に対するコメント・フィードバック comment and feedback
- ⑤ 関連した質問をする related questions

この五点の役割をバランスよく用いることで、生徒の発話を促したり、speaking 力を向上させたりできることが分かった。

#### (2) 生徒の発話に関して

導入段階では、英語でのやりとりを経験する段階として、small teacher や語彙活動を通して、単文でのやりとりを繰り返し行った。活発なやりとりの段階では、生徒が英語で会話を続けることが一定時間できたものの、単調なQ&Aに終始し、話題の広がりが見られなかった。総合的なやりとりの段階では、この課題を解決し、相手の話した内容を質問やコメントなどで広げていき、より自然なやりとりへと近づけることができた。

### 5 今後の展望

英語をツールとして使えるようになるためには、やはり読解力や文法力を育てるだけでなく、即興的な speaking 力の育成が必要となる。本研究をここで終わらせるのではなく、教師と生徒の変化を追研究として続けていく中で、更なる授業改善を目指していく。